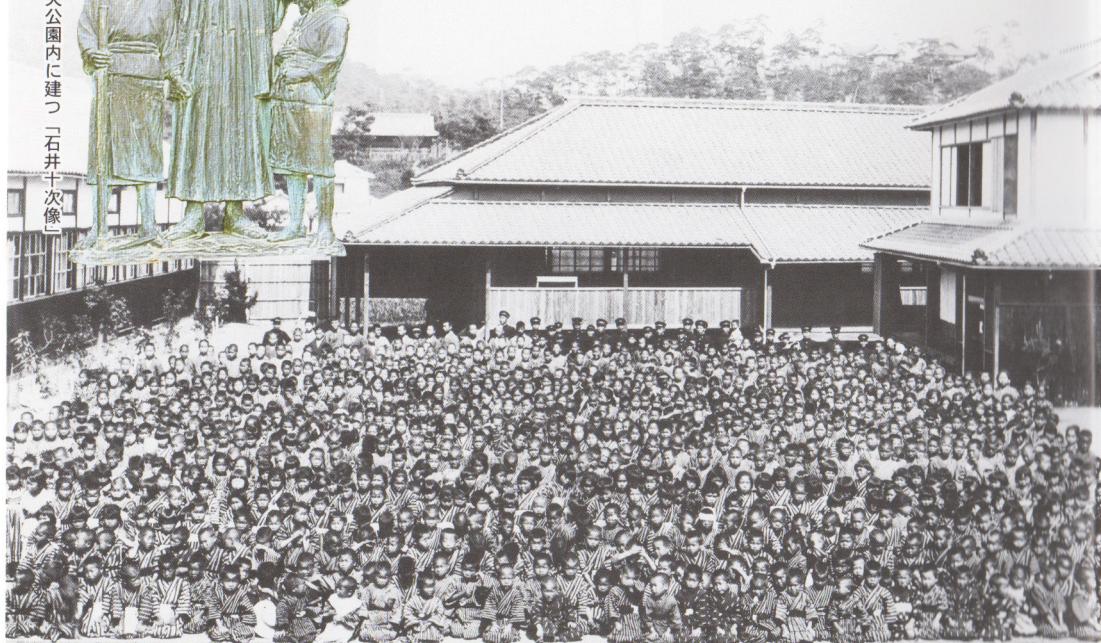


# 石井十次顕彰会だより

第7号

高鍋町中央公園内に建つ「石井十次像」



財団法人 石井十次顕彰会

石井十次顕彰会事業内容に「福祉施設へ賛助金贈呈」という項目があり今年は、次の施設へ送られた。



福祉施設賛助金  
日向市北町 1105-2 「風車」溝口裕子様へ



高鍋東小学校へ



ヤングコアたかしん（高信杉の子会）会長 稲田格様から尾崎理事長へ寄附贈呈された



町内小・中学校の道德授業（石井十次を教材）のビデオ  
テープを各校に進呈

## 募金者報告第七号

平成九年四月一日  
平成十年三月三十一日

### 篤志寄付

高鍋町 宮崎太陽銀行高鍋支店 代黒木 勝様

寿島太陽銀行高鍋支店 代後藤栄士様

立正校正会高鍋教会 代久保勝代様

津房商事有限会社 代津房昌明様

高鍋信用金庫 代税田格十様

黒木本店(株) 代黒木敏之様

石井十次顕彰チャリティ高鍋町ゴルフ大会様

坂本実業博友会 代坂本博文様

館野 キミ様

ヤングコアたかしん（杉の子会）代税田格十様

原建設(株) 代原通様

川南町 都築アツ子様

糸田 節夫様

串間市 木島 正之様

宮崎市 印刷センタークロダ 代原田安政様

赤木 伸隆様

鈴木 誠司様

### 忌明寄付

高鍋町 小椋キヨヨ様

森 俊彦様

宇田津英二郎様

石丸 正弘様

井手口健二様

宇田津一郎様

鈴木 笑子様

岩切 正美様

このたびは、多額のご寄付をいただき

誠にありがとうございました。厚くお礼申し上げます。

皆様のご協力のもと顕彰事業も年毎に広く深くなつて参

りました。「石井十次顕彰会だより」も全町民にお届けして

以来第7号となりました。ご家族みなさんでごらん下さい。

発行者：石井十次顕彰会  
題字：宮崎県知事 松形祐堯  
印刷：衛印刷センタークロダ  
発行日：平成10年3月31日

# 第六回 石井十次賞

社会福祉法人、横浜訓盲院へ

平成九年四月十一日石井十次生誕  
記念式典当日に正賞「楯」と副賞  
が贈られた。

## 石井十次賞選考委員会



「石井十次賞」  
正賞の楯

(石井十次の  
ブロンズ像と  
茶臼原憲法)



(選考風景)



謝辞を述べられる横浜訓盲院  
理事長 今村義彦氏



第6回石井十次賞として、  
社会福祉法人横浜訓盲院  
が満場一致で決定された  
ことを報告される「石井  
十次賞」選考委員長福田  
垂穂氏



尾崎理事長より今村義彦氏へ賞状が手交された



▲ 坂道もある施設  
▼ (一般人と同じ環境になること)



訓盲学院の校門



点字で打たれた教材（算数）

入れ大きな教育効果を上げられている。

その後、昭和五十七年には新たに、“生活訓練センター”を設け中途失明者に対する各種の訓練を実施している。

又「全国盲ろうあ難聴(幼)児施設長協議会」の事務局も務めるなど広く社会に貢献されリーダー的役割が果たされている。

横浜訓盲院は、明治二十二年（一八八九年）キリスト教伝道のため来日していたアメリカ人のC・P・ドレーバー女史と、宣教師で息子のギデオン・F・ドレーバー親子が、横浜で貧しい盲女性と出会ったのがこの事業の発端である。

当初は、「盲人福音会」という名称で大人の盲人の保護と教育を行っていたが、大正九年前理事長の今村幾太がこの事業を引き継いでからは、キリスト教精神を柱に盲児教育へと転換した。そして後に、“横浜訓盲院”と改め全寮制の私立盲学校として運営された。特に、寄宿舎生活を通して、家庭的雰囲気を大切にしながら生活訓練に力を入れたほか、盲人野球の創始者ともいわれており、又ハーモニカバンドの編成等、机上の学習だけではなくスポーツや音楽を通じて情操教育の面でも大きな成果を上げた。途中、関東大震災・太平洋戦争中の戦災等のほか、困難を乗り越え常に経済的危機に直面しながらもさまざまな家庭事情を持つ盲児を積極的に受け入れ、今日の盲児施設の先駆的役割を果たしてきたのである。

さて、戦後は、盲児施設と盲学校という一本柱で運営されてきたが、その中でハーモニカを中心とした器楽合奏は多くの方々に深い感銘を与えるようになった。しかし、昭和四十年代を境に年々“盲重複障害児”が増加してきたことからそのような盲児も積極的に受け入れだされた。



受賞者  
今村義彦氏

社会福祉法人 横浜訓盲院 理事長

石井十次頭影会だより

## 顕彰意見発表

平成九年四月十一日の石井十次生誕記念式典に於いて、高鍋町内の小学校、中学校、高等学校の児童生徒の代表の皆さんが「石井十次先生の顕彰意見発表」をされたものです。  
高鍋町内に小学校・中学校・高等学校各二校があり隔年毎に交代で行われております。



高鍋西小学校  
五年

甲斐あやみ

### ■石井十次先生を見習つて

私が、「こ児の父」とよばれる石井十次先生を初めて知ったのは、小学校一年生の時でした。初めて知った時は、「すごい人なんだ。」ぐらいにしか思っていませんか? 「なわの帯」の話や、全然知らない人の子どもを何千人も育ててきたなどの話を聞いていました。

そんな石井十次先生の生がいで、私が特に心を打たれたことは、なわの帯の話や初めてこ児をあずかつたこと、医学書を焼いてしまったことの三つです。

「なわの帯」の話では、なわの帯をしめていた友達の松ちゃんがいじめられているのを見て、十次先生は、自分のりっぱな帯と取りかえてあげました。私だったら、せっかくお母さんが作ってくれた帯を友達にやるなんてぜつたいできません。友達を助けることぐらいしかできないと思います。私はこの話を聞きました。



高鍋西中学校  
三年  
清水俊次

### ■石井十次先生について思うこと

昔、石井十次という人がいました。人生の途中でなりたかった医者になることを断念し初めは岡山、続いて茶臼原に孤児院を開きました。そして、孤児院で三百人ばかりの子供といつしょに住み、後には、「孤児の父」とたたえられるようになりました。

ほくは、彼はなぜこのように有名になつたかを考えてみたいと思います。

十次はある意味では「変わった人」だつたのではないかでしょうか。なぜなら、十次は人と違ひ違つ生を歩んだのですから。十次は二十四歳のときにそれまで目指していた医者への道を完全にあきらめ、孤児救済への志を立てました。それは、彼の周囲にいた人たちにじつては考えられない行動だつたと思います。もし、ほくが、十次の近くにいる人だつたらこう思つたはずです。「どうしてそんなことをするのか。医者への道を歩めば安泰なのに。」どうして今までの目標を新しい目標に替え、まだゼロから歩み始めるのだ。それでも、十次は、自らの信念を貫き続けました。その点十次は「実行」のできる人だつたのだと強く感じます。

いて、「なぜこんなことができるのだろう」とふしきでした。十次先生の人を思いやる心が、私には想像もできなくらい大きかつたためにできたことだと思います。

初めてこ児をあずかつたことについては、「十次先生の家は、まずしかつたはずなのはどうしてこ児を引き取つたのだろう。十次先生って、心のきれいなやさしい人なんだなあ」と、とても感心してしまいました。十次先生は、めぐまれない子どもたちをほつておくことはできず、こ児たちを救つてあげたいと考えられたのだと思います。

医学書を焼いてしまつた時、私は、「ああ、六年間勉強してきたのが水のあわになつてしまつ」と思いました。私だったら、ぜつたいに医学の道に進んで医者になつたと思います。医者になつてから、こ児たちのめんどうをみればこ児も病人も助けることができて、こ児救さいのためのお金もたくさんできると思うからです。

私は、小さいころから、かんごふになることをゆめ見てています。病気の人や、かぜをひいてしまつたたくさんの人を助けてあげたいからです。また、世界には、まだ薬も買えないほどの大まじい国があるので、そこに行き、けがをしたり、病気になつたりした人を笑顔ではげまし、助けてあげられるかんごふになりました。そのためには、今からこまつている人に手を差しのべてあげられるようにしたいです。

私も石井十次先生を見習つて、色々なことに努力したり人に親切にしたりできるように心がけて、心の美しい、思いやりのある人になりたいと思っています。

ぼくははじめて十次が「変わった人」だと思つと言いましたが、十次のような「変わった人」であることはすばらしいことだと思います。人はみなそれの道を歩むわけで、一つとして同じ人生はありません。ぼくが「変わった人」であることを恐れずに、自分の選んだ道を信念を持つて生きていけたらいいなと思います。



石井 英里子

## ■『石井十次先生を想う』

キリストンであつた石井十次先生は「人間は、二人の主には仕えられない」という教えに従い、医学の道と、孤児救済の道、この二つの道の選択を強いられながら一つを選択されました。あと六ヶ月余りで、医者になれるというのに、彼は「病を治すのは、誰でもできる。しかし、孤児救済は、私にしかできない」と考えかつ、医学の書物を全部焼いてしまつたのです。私は大きな驚きです。

医者をしながらも、孤児救済はできるし、自らも貧しい上に、何の為に見ず知らずの孤児達を救つ必要があるか、私には当初理解ができませんでした。自分の志を捨ててまで…………。

しかし、彼はキリストの夢を見ました。その時彼は、自分が今何をしなければならないかということを自ら悟つたのでした。それから、苦しい生活をあして孤児救済の道一本に絞つて専念していくのです。

彼の一生にはキリストの教えが大きく関わっていたのですが、その中でも彼は、「自愛」つまり「いくくしみの心」をモットーにしていました。

彼の作った茶臼原憲法には、人間は全て同胞で、お互いに信じ合い助け合うこと。

人間は皆、大自然の恩恵のもとにいつも仕事に精を出すこと。  
人間は皆、天に感謝し、節約を保ち、人の為に提供すること。  
と記されています。まさにこれが彼の生きる証なのだと思います。

ところで、今日の私達には、彼のこの精神が欠けているのではないのでしょうか。飽食時代、つまり買いたい食料は残飯へというようないたくな時代です。また奇妙な犯罪や殺人、私達の身近では学校でのいじめなどが数多く起こっています。その典型的な例が、オウム真理教の“地下鉄サリン事件”です。彼らは自分達の目的を達成したいが為に自分の利益の為に、無差別にかけがえのない一般民衆の命を奪うという暴挙にしました。

人間である限り、してはいけない行為であるはずですが、現代の人間の中に「これが当たり前の世の中」「こんなことはあり得る」という錯覚に陥っているのではないかと思うか。現代の日本社会はそのような点でおかしいと思います。個人主義＝利己主義という構図つまり、自分さえよければいいというところがるように思えます。だからこそ、石井十次先生の精神を地球規模でもっと多くの人々が深く知ってほしいと思うのです。そして彼を鏡として生きて行かなければならぬと思います。本当に彼は高鍋が生んだ世界の偉人です。彼を語りにし、彼の教えを心に刻み、そうしていつも彼を目標にして誰かの役に立つて行きたく思います。

（英語でスピーチの日本語訳です）



劇の一コマ



大雨で増水を気づかう孤児たち

## 第七回 石井十次顕彰会のつどい

■平成九年一月十五日 ■高鍋町中央公民館ホール

## 児童劇

## 「岡山の大洪水」

石井十次先生がすぐ近くにある高鍋町立高鍋西小学校では、「石井十次先生をしのぶ会」を毎年全校児童が参加して行い、伝統的に六年生全員参加による「石井十次の劇」を披露している。

## 高鍋西小学校六年生全員出演

中央公民館入口での  
石井十次写真展

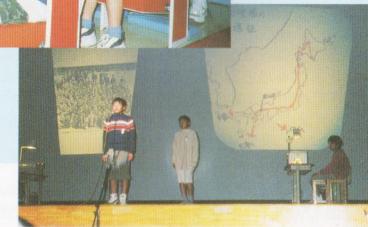
西小学校児童の作品展



石井十次歌の大合唱（手話を交えて）



劇の終りに各班の紹介をします 大道具班です



研究班の発表





明日に伝えたい  
石井十次とその精神

尾崎一男  
財団法人石井十次顕彰会理事長

「福祉」という言葉さえなかつた明治時代の日本は、富国強兵を主軸に、先進諸国と肩を並べようとしたがって、福祉などは親族間で相互扶助させるか、民間の篤志家に任せていた。こうした時代に、個人の力量をばるかに超え、児童福祉事業（孤児救済三千人）をみることに成しとげた男がいた。その名を石井十次という。

十次は、一八六五年(慶応二年四月十一日、宮崎県鬼湯郡高鍋町馬場原に、高鍋藩(三万石)の下士級武士(十五石)・石井万吉、乃婦の長男として生まれた。父万吉は六尺(百八十才)を超える偉丈夫、識見手腕非凡な人物で、郷土の信頼を一身に集めていた。とくに灌漑工事に秀で、宮崎県に出仕し、県内各地に「万吉堤」の名を残しているほどである。母乃婦子は、愛戀に富み、近隣親戚の敬慕を受け、とくに貧家の子女の面倒をよくみた。十次はこの温かい家庭に、純情についていった。

の業である。その活動の心も、優雅つたものは、地位も名譽も、優雅な生活も求めない仮の心であり、無私的心、弱者を思う神の心、一種の悟りの心境にあつたと思う。十次は後年、医書を焼いたときの心境をこう回想している。

（前略） 予が孤児院事業に着手せし以来、人は三人の主に仕うるに能わず。医学を選ぶか孤児救済事業を選ぶか、二者其の一を取れよとは、いよいよ予が心を襲うところの難題なりき。（中略） か年学びたる医書に石油を注ぎ火を放て焼尽くし、全心を孤児院事業に抛ちやり。これにより心衷に一

テレビ放映を通して全国民に石井十次先生の心を広めたいとNHK会員  
海老沢勝次氏（円内）へお願い NHK宮崎放送局長津村 洋氏へ陳情

この年の十一月二十日、  
といふ若さで私立孤児院尋常高等小学校を設立し、十人余人の教師を岡山市内の学校から迎え、校長、教頭の陣容を整え、文部省認定の学校を設立しているのである。当時の宮崎県下の就学率を調べると、

「出でて独立せざるより、三十二歳にして、  
三、青年時代（十六—二十歳）  
「働かせる」。本人の希望で院  
内で実業教育を受けさせるとか、  
民家に奉公させるとか、社会に  
出て独立せざる。

省略 無制限収容を宣言  
伝えたい十次の精神  
いま日本は暖衣飽食、物で栄えて心で減びると憂慮される世情で

「い、人情純朴にして、地勢高く水清くして衛生に適する地方であること。口、幼年児を有せざること。正直で誠実な農家に託す。二、里子の数は一戸に限る。三、毎月の養育料を払うとき、その体重を計り、養育の良否を観察し、成績不良のときは、これを他に移す」

以上のように、預かっている孤児を細心の心づかいと綿密な計画で育てた。そのうえ、成績優秀な者は市内の中学校へ進学させてもらひる。

小学校設立

の苦悶をなく、外友人の忠言山み  
全力を天命の事業に傾むること  
を得るに至れり。この時、妻は泣  
き、友人は悲しみ、世人は発狂せ  
りと評せしも、予は始めて心裏言  
うべからざるとこらの福を感じ  
り。(後略)  
この心境は最高の「思いやりの  
心」であり十次ならではのことであ  
つた。

「一、家族主義 二、委託主義 三、満腹主義 四、实行主義 五、実行主義」  
「一九〇二年（明治三十五）岡山孤児院十二則」を作っている。  
「孤児院十二則」を作っている。

十年／十六歳）内野品子と結婚し、小学校教師となり、翌八年（明治十五／十七歳）宮崎警察署の雇となり、郷土の先輩、荻原百々平の知遇を得、その援助によつて岡山町医学校に入学した。

岡山に着いた十次は、荻原医師の紹介状を携え岡山キリスト教会を訪ね、その神體を極めるに至つ

そのとたさざるなり  
このような父母たちの強い反対  
のなか、孤児の数は増え続け、百  
人余となつた。十次は苦惱の末、  
意を決して医学を断念、孤児救濟  
に専念すべく、八九年（明治二十  
二／二十三歳）一月十日未明、三

十一日

## 医書を焼く

21

くれた真新しい紺の帯を  
締めて出かけた。祭りの  
境内では大勢の子供たち  
が楽しそうに遊んでいた。  
松吉という貧家の子が、  
境内の片隅で泣いていた。  
わけを尋ねると、「汚い着  
物に縄の帯を締めている  
ので、皆からからかわれている」  
との言で、十次は松吉をかわいそう  
に想い、自分の袖の帯を松吉の帯  
と交換し、縄の帯で仲間と一緒に遊んだ。  
帰宅した十次の姿を見て  
母乃婦子は、そのわけを尋ねた。  
松吉とのかかわりを語り終るや  
母は、「それはよいことをしてあげたね」と、その好意をほめた。  
このような家庭に育つたことが

た。その結果、岡山キリスト教会は、十次の精神的故郷となつた。

## 児童福祉につくしたノ

このころ、生活に苦しむ人々のなかには、子どもも養えなくなる親もありました。しかし、政府の対応度は不十分で、社会福祉も民間の慈善事業が中心でした。宮崎県出身の石井十次は、こうした子どもの生活に生涯をささげました。岡山で始まったかれの活動は、支援者を得ながら広がり、孤児や天災にあつた子どもたちを全国から引きとり、その数は多いときには1,200名に達しました。かれは、宮崎の茶臼原原野に施設を移し子どもたちとともに開拓を行なながら、その教育に努めました。



- ・東小学校での道徳の授業（6年生）  
(石井十次を教材として)